

除。战友とは再会を約しそれぞれ懐かしいの郷里に向かった。

私の追憶

高知県 大西清盛

昭和十二（一九三七）年に始まった日支事変は一日と拡大の一途をたどり、ついに昭和十六年十二月八日、あの世紀の第二次世界大戦へと突入したのである。当時の戦争の様子は大本営の発表によるのみで、我々国民は一喜一憂するのみだった。当時の事は走馬灯のごとく全く過去のものとなった現在である。十分な記憶もない。しかし、私なりに断片的にその當時を彷彿してみたのである。

ごく短い期間ではあったけれども、私も大戦末期の中国戦線を四六時中駆け巡り、またその時点において人生のはかなさをも十分に味わった一人でもある。

昭和十九年六月二日、この日は私の生涯忘れ得ない日である。当時私は、高知市丸ノ内にある高知営林局に勤務していた。しかし私はその営林局を退職した。そして当時満州国の半官半民の満州林業株式会社に社員として採用され、ソ満国境の街、佳木斯支店勤務の辞令まで受け取っていた。営林局退職後少しの間、私は故郷に帰省し渡満の準備と休養中だった。そして六月早々渡満の予定で新しく勤務する会社と新日本社到着などの打合せが出来ていた。

その五月二十五、六日に海外渡航証明を受けるべく所轄の駐在所へ出掛ける寸前のことだった。私あてに一片の召集令状がとび込んで来た。一片の紙切れだが、これが私の運命を一八〇度転回させた。

昭和十九年六月二日、私は高知市朝倉の西部第三十四部隊第二中隊第三班へ入隊を余儀なくされ、以来終戦、復員まで私は軍隊の消耗品となった。

私たち第三班は約三十人、そのうち最年長者は三十四・五歳が大半を占めていた。入隊してみると今まで

私たちが生活して来た一般社会とは全く異なり、何とも形容しがたい特異な世界だった。

入隊翌日から、六時起床に始まり、班内掃除、点呼、飯上げ等で、我々初年兵は「早駆け」で少しでもモタモタすると二・三年の古兵殿より過分なる手厚いおもてなしをたくさん頂いた。私は当時二十一・二歳だったので幾分は良いものの、三十余歳の戦友は大変な苦勞だった。

そんな日常が続くある日「三班の初年兵は全員石廊下へ集合」の命令であった。その内容は野戦要員の発表で、我々初年兵のほとんどが野戦要員として駆り出されることになった。

それから程なく私たちは操六四七〇部隊（高知編成）独立歩兵四一二大隊（大隊長田所大次郎大尉）第二中隊第二小隊第二分隊所属となり、私は最年少者のためか一一式旧型軽機関銃射手として編成された。

編成の日を境に野戦行きの準備に忙殺される毎日となった。今まで約四十日間着続てきたオンボロ軍衣袴を脱ぎ捨てて、全く新しい軍衣袴、編上靴、その他

に着替え、野戦でいつまでも共に過ごす軽機等を整備して昭和十九年七月十七日朝、編成を完結したと記憶している。

これより近日中にどこかの野戦へ出発となると思えば何だか形容しがたい変てこな気持ちだった。

編成終了後、間を置かず夜分兵営を出発した。兵営近くの朝倉駅にて乗車、高知→高松→門司→朝鮮釜山着、釜山に一泊、翌日釜山から有蓋列車にて、夜を日について満州を北上、山海関→南京→上海に集結、長峯旅団長の直接掌握下に入り、上海において、約五十日間にわたる猛訓練を重ねたのです。

その猛訓練の最後の実包による射撃訓練が行われ、屯営出発以来起居を共にして来た一一年式軽機の実包射撃をした。約五、六十発発射しただろうか、突然、私の両の耳が全く聴覚を失ったのである。訓練終了後、古谷分隊長に両耳のことを報告し、翌日戦友数人と共に衛生下士官に引率され上海陸軍病院で診察を受ける事となった。

私は、多分双方の耳の鼓膜が破れたのだろうと思っ

ていたが、軍医殿は私の耳を無造作に一見し「ヨシ異常なし、二、三日すれば元通りに聞こえるようになる」と。二、三日後元通りになり、淡い内地還送の夢はどこかへ飛び去った。

程なく上海（呉淞）において輸送船に乗船、九月二十四日、海軍護衛の下に上海を出航した。我々は一体どこへ行くのやら皆目見当が付かない。全く不気味な船旅であった。船倉には大砲、馬匹等が充満、上陸用大発艇もある。また、おびただし量の孟宗竹が甲板に満載されていた。後で分かったことだが、この孟宗竹は輸送船の沈没にそなえ用意された私たちの救命用のことだった。そして私たちの船団はシナ海を南下したのである。

大戦末期の東シナ海は物騒このうえなく、水中から上空から、いつドカンとやられるか分からない状況下であった。だが二十六日夜半、福州沖の泊地に進入出来た私たちの輸送船は幸運にも一発の弾丸も受けなかった。全く天祐であった。二十七日未明、輸送船か

ら大発艇に移乗するのだが、艇は左右に揺れ、装具約四十キロを身にまとい、輸送船からたらした縄ばしごを降り途中から飛び降りるのだが、タイミングが定まらない。「エエイ！ ままよ」と覚悟を決め一挙に飛び降りた。

全員移乗と同時に艇は船先を揃え、一斉に全速力で発進、海岸線へ向け真一文字に突進した。そして艇の停止と同時に我れ先にと艇から飛び降り、ちょうど腰辺りまで海水に漬かりながら陸地に向かい、難なく奇襲上陸に成功したのである。

私たちはここで初めて福建省の福州攻略に向かう事が判明したのである。中国軍の気配は無く、一兩日のんびりとした進軍が続いた。寸時の休息もなく部隊は前進前進また前進した。途中、芋畑があらうものなら編上靴の先端で生芋をけりおこし土付きの生芋をかじりながら軽機を天秤にかつき夢遊病者のごとく歩いた。

と、突然どこからともなく「ピュン！ ピュン！」との弾音に「ハッ！」と我れに返った。生まれて初め

て聞く弾音に今までの夢心地も睡魔も吹き飛び、ただ恐怖で震えが五体をかけ巡る。復員後五十余年あの時ぐらい恐ろしかった経験はほかにない。

この日を境に翌日から実戦となった。一日、二日と日毎に敵さんのチェッコ式水冷重機、迫撃砲にも最初のような恐怖心はなくなった。

堂麻に上陸後、補口―幕岑―連江―湯嶺―茶亭―頂虎―梅嶺―嶺下―屏山―福州へと進撃したのである。

その間私の愛機一一式も単発、三発、五発点射と一回の故障もなく十分に働いてくれた。目的の福州を攻略入城。私たち第二中隊は十月五日、福州市の突端の洪山橋を占領、この地点を警備することとなった。私たちの分哨は兵舎より数百メートルの將軍山であった。

三日に一度くらいの分哨勤務で、分哨にも各機が重要なため陣地にて一泊、翌朝上番と交替で下山するのである。また度々の討伐行もあり、全く多忙な状態が続いた。

戦局はいよいよ急迫したらしく、我々第十三軍は米

軍の上陸に対し、上海、杭州への徴収の命令が下達された。私たち一線部隊はいつも中国軍と至近距離にて対峙しており、死神を背負っているようなものであった。

昭和二十年五月十五日の暗夜半、私たちは洪山橋兵舎を一人の損失もなく迅速に撤退、大隊本部のもとに掌握されたのである。同夜半過ぎ、我々の撤退をいち早く察知した中国軍を振り切り、部隊は約一五〇〇キロメートルの海岸線を一路杭州へと徴収・集合作戦を遂行した。

当初は浙江省の蒋介石直轄の第八十師団、途中からは同じく蒋介石直轄の第七十九師団の追撃を受け、随所で交戦を行いつつ杭州へと路を急いだ。私たちは今日は尖兵中隊、明日は殿となり杭州へ向かったのであるが、前進はよいが殿撤退は何とも具合悪く無気味であった。

この集合作戦中のことだった。とある地点で休止の命令が出た。戦闘中はいつも食糧は無く現地徴発で賄っていたので、その時も下っ端の我々が菜方、飯方

に分かれ近くの農家へ入る。どの農家も数日前から安
全地帯へ逃げ去っていた。我々はすく米を手に入れ、
留守宅の炊事場を借用炊飯を始めた。程なく菜も出
来、一個分隊分の飯も出来上がる頃、二階の床板の間
間から何やら白い二、三センチほどの物体がポツリポ
ツリと飯鍋の中に落ち込んで来る。ハテ？ と最初は
じっと見ていたが、二、三十個ほど鍋に落ち込んだ
時、戦友の一人が二階に駆け登りその物体を確認した
ところ正体はうじ虫だった。この家の住人は我が軍が
ここを通過することを数日前から察知し、留守にした
家の炊事場真上二階に置かれていた便器のうじ虫が炊
飯の火の温もりで飯鍋に落ち込んだものである。いつ
出発命令が出るやら、私たち十二人は腹ペコペコ全く
恨めしい。「出発命令」で催促をする腹の虫をなだめ、
早駆けで中隊の中へ割り込んだ。何とも言いようのな
い情けない一日だった。

五月十五日夜半の福州撤退以来の主な街、集落は連
江―丹陽―羅源―寧往―寧福―温州―棠清―台州―天

台―新昌―百官―紹興で、錢塘江大橋を渡り七月中旬
待望の杭州に入り浙江大學跡の兵舎に入り、約二カ月
間、一五〇〇キロメートルの陸路を踏破し、この集合
作戦は終結したのである。福州出発時の支給品である
編上靴も二カ月間の作戦でボロボロとなり、スクラッ
プとなった。

浙江大學兵舎にて休養すること約三週間、私達がこ
の地にて所屬した第六軍の「光二号作戦」にまた参加
となり、私たちは杭州奥地分水に進軍したのである。

当時、日本製新型「輕機九六、九九式」に比べ「旧
式一一」は重い輕機であった。一分間五四〇発で、戦
友たちの持つ三八式小銃と弾薬は同じであった。いざ
となれば小銃弾が使用出来るので弾薬の心配は無い。
いざれこの鉄の戦友と一緒に心中するのであらうと当
初から覚悟は出来ていたのである。本隊は奥地分水に
進撃、私たち若干の者は分水の手前桐廬において部隊
が乗船して来た船舶の警備に付いた幾日目のことだっ
たか、分水へ進撃した部隊全員が引き揚げ、乗船、私
共への警備命令は解除された。

私たちは杭州へ帰營、そして之江大学校庭に整列したがその夜の上官達の普段と違う異様に気付いた。そして意外な訓辭が言い渡されたのである。

「我々の故国日本は、この十五日、米国および連合国に対し無条件降伏……」と。私たちはただ呆然とし、なす事を知らず、その場へ言うに声なく座り込んだ。この時点において世界大戦は名実ともに終止符を打ったのである。上官より「兵はみだりに騒ぐことなく、本部からの何分の指示を待つよう」との話があり解散となった。時は昭和二十年八月十九日夜半のことだった。その夜は更けるとともに喧々ごうごうになる。そのうち、時間とともに冷静になれたのか全員寝に付いた。

その後、上部からの指示に従い武装解除となり、一カ年有余苦業をともしした「一一式軽機」とも決別となったのである。間もなく中国政府の指示により嘉善県嘉善捕虜收容所に收容された。それからは私たちが監視する中国兵とは個人的には敵味方であろうはずがない。收容後ただちに国境の垣根を超え、双方打ち解

けた朋友となった。そして手持ち無沙汰の私たちは使役として鉄道線路の見回り役が課せられた。二、三人の戦友と連れ立ち、丸腰徒歩で列車の通過した後を追って、機関車のボイラーから落ちた火で燃えている枕木を消す役目であった。

当時枕木も大分古く、中には青森、秋田産などの枕木も布設されていた。そして大隊は各郷土部隊に改編され、以後は郷里の顔見知りの戦友と過ごせることが出来た。

復員

激動の二十年も過ぎた頃、ポツポツ復員の話が出始め、やがて待ちに待った復員が始まった。ある日私たちは上海市政府に入り、いよいよ乗船復員の日を一日千秋の思いで待つこととなった。

懐かしの故国へ私たちを運んでくれる復員船が程なく上海に来る頃のことである。私より一年遅れ福州へ来た私の隣村吾北村の戦友岡林誠朗君は私の軽機用の弾庫を持つ弾薬手だった。もし私が敵弾に倒れた場合

は彼が私に替わりに射手となる任務だった。彼は本来少々病弱気味だった。私たちが復員のため上海市政府に入った頃からかなり胃腸が悪いようだった。いつも軍医の指示にて療養に努めている最中だった。

福州撤退以来の彼は無二の戦友だし、私はどうしても一緒に復員をと願っていた。ある日のこと、私は「戦友よ、私は医師の心得など全くないがイチかバチか胃腸の灸を据えてみるがどうか」と彼に話したところ、彼は即座に「大西上等兵殿！ ぜひ頼む」とのこと。

早速、私は上海市内へ外出する戦友に軍票千円を渡し中国製艾もぐさを手に入れた。私は全くの素人で灸つばなど知るはずがなかった。しかし大勢の戦友の中に胃腸の灸の経験者がいた。その戦友は愛媛県出身の三宅と言う戦友だった。早速三宅戦友に事情を説明したところ、上半身裸となり背中上部の灸つばを見せてくれた。私たち兵隊はいつも針、縫糸を携行していたので、縫糸を頭大の輪にして三宅戦友の首に掛け、灸の壺痕へ糸の端を垂らし糸に印を付けた。それは三セン

チ径ほどの大きな灸つばだった。

早速班に立ち戻り「結果の受合は出来兼ねるが、かまわないか」と念押しをし、「大西上等兵殿！ かまわんからやってくれ」との了解を得て、私は持っていた艾を大きめに丸め、瘦せ細った彼の背中へ縫糸を首から垂らし、印の所へ艾を置き、火を付けたのであった。その大きな艾が徐々に燃える。やっと燃えるのが終わった。彼はどれ程か痛かったことか。

そんなことがあった直後、軍医の最後の病弱兵の診断が行われた。当日、軍医の診断用に各自の大便を持参、検便により復員か残留かを定める日であった。どうしても一緒に復員を願ひ、私の健康な大便をマツチ箱に入れ岡林戦友に渡した。間もなく戦友は医務室から満面の笑顔で帰って来た。上首尾との事であった。

戦友の話によれば、軍医殿は体を一通り診察のうえ、私の渡した用便を検便のうえ「よし！ 全快復員」との申し渡しだったという。戦友は日一日と快方へと向かい、懐かしの故国の土を踏んだ。後日の話に

よれば、残留を申し渡された戦友は誰一人復員出来なかったとのこと、残留者戦友の冥福を心より祈るものである。

岡林戦友は現在、有限会社岡林土建を経営、村内外の信用を得て、現在も極めて健在で活躍している。

昭和二十一年二月某日、私たちを乗せた復員船「海王丸」は故国へと向かった。戦場へ向かった時の悲壮な心境に比べ、晴れて故国へ帰る心境は感慨ひとしおであった。ただ我々とともに今故国へ復員出来ない戦没諸兄に対しては何とも言いようのない一抹の悲哀を禁じ得ないものがあった。

「海王丸」は鹿児島湾へと入港した。煙たなびく昔変わらぬ桜島を目前に、ただ涙が後から後から止めどもなく頬をぬらしてやまず、二度と故国の土を踏むことはないはずだった私たちの生涯において、この時ぐらい感動を覚えたことはなかった。上陸と同時に米軍に頭からDDTの消毒を受け、その夜は廃虚となった鹿児島県の一隅に入り、天井から差し込む月を眺めて

故国の第一夜を明かした。

翌日、鹿児島駅前広場に部隊全員整列、大隊長代理、松岡第一中隊長の「光輝ある独立第四一二大隊の編成を解く」との挨拶により、ここに復員兼解隊式は終了したのである。

そして生死をともに過ごした懐かしの戦友達と再会を約し、それぞれ家族の待つ郷里へと四散したのである。

嗚呼！ 戦友・小松護君

山岳の斜面を登りつめる。ようやく目的の場所に到着したが部隊の前進が止まった。先頭が山頂に到着した様子、闇の中で顔をあげてふと見ると、前方はるか彼方一面に煌々と点灯している大市街が見えた。「福州だ！」全員息を止めて見つめた。

時刻は何時だろうと思いつつ、軽機をしっかりと肩にかつぎ峠を下り、石畳の険しい狭い山道を嶺下へと下りて行った。山上の方面にはなお銃声が盛んに聞こえていた。

山の中腹ぐら이었다、ようやく闇の帳が明けた。突然前方山上の稜線から敵チェコ銃の猛射を受けた。小隊は立往生し叢の中へ一斉に伏した。叢の斜面にピタリと身を伏せ地面に顔をつけながらふと後ろを見ると、近くに第一分隊の軽機射手の戦友小松君も同じように身を伏せていた。

時刻の経過は覚えはないが、突然その小松君が「ウーン！ ウーン！」とうめく。すぐ行ってやりたいう気持ちがいっぱい。だが軽機を右にかかえ敵の銃火に曝されている自分は身動きが出来ぬ。その時、小松君の弾薬手の谷口君が近づいていったが手の下しようがない様子だった。小松君は腹部に敵弾を受けていたのだった。小松君は最後の気力で「天皇陛下万歳！」を唱えて息絶えた。今もまだその声が耳に焼き付いており、福州の嶺下の空を思い出すのである。十月四日の朝であった。

(私は一昨年、小松君の御子息に父君のご立派な最期をお知らせしたのでした)。

追記

私にとって二年近い軍隊生活、戦場生活は貴重な体験だったと思っている。当時私たちは長兄を筆頭に九人兄弟姉妹であり、次兄、すぐ上の兄と三人はそれぞれ中支、沖縄、南支へと出征していました。そして兄達も私も幸運にも無事復員出来た。

私たちは愛媛県境の山間の一農家に生まれ、サツマイモ、トウキビ飯、麦飯等の粗食に耐え成長した。そんな境遇に育ったせいか幼少の頃から健康体で、出征以来度々の作戦討伐等には必ず参加した。

私たちの第四一二大隊は、ほとんど高知県出身者で、一部は山口県、愛媛県出身者で編成されていた。戦没者一四〇余人の大半は県の出身者で、高知市五台山麓の護国神社に鎮魂されている。

私は復員以来、毎年四月二日の春季慰霊祭には万難を排し参列している。

田所第四一二大隊長をはじめ百人近い元戦友たちも集まり、心より戦友のご冥福を祈っている次第です。

時には元長峯旅団長閣下のご遺族が金沢市から参列し

て下さる。

参拝後は護国神社近くの会場にて、各中隊別に昔話に花を咲かせ、また来年の再会を約している。

軍隊生活の思い出

埼玉県 稲垣吉夫

現役兵として昭和十八（一九四三）年二月一日、連隊砲員として近衛歩兵第三連隊（六本木にあった）に入営する。北支派遣要員となり、同年二月八日品川出発、東海道線を下り、京都等の主要都市駅では国防婦人会の方々に「御苦勞様、元氣で行ってらっしゃい」等の御見送りを受け、瀬戸内海を左に見て、広島厳島神社の海中に建つ鳥居を眺めながら下関に着き、直ちに乗船、釜山港へ向かう。夜となつて冬の寒さを感じる。海は荒れて酔うが教時間で釜山港へ上陸、今度は列車で朝鮮半島を縦断する。

京城（ソウル）は夜中の通過、ストロブ列車は二重

窓でも寒い。真冬の夜中では仕方ない。満州へ入ったらなおさら寒いことと思う。特別列車でも速度は遅いが、あまり停車は無い。奉天（瀋陽）そして山海関は昼間の通過で、万里の長城は山の頂上付近で遠望出来た。なおも走って、天津、濟南、泰安、大紋口と進み兗州へ到着する。ここは歩兵第三十二師団本部の在所で、赤れんがの立派な建物の兵舎が並ぶ。ここで一泊し、翌日は師団長も出席、軍旗も参加して入隊式が厳かに開かれた。再び列車で鄒県、両下店、界河、勝県、臨城を経て棗莊へ着く。ここでまた泊まり、国防婦人会の歓迎を受け、ごちそうにあり付く。

明日はいよいよ山奥の警備地へ向かつてトラック輸送。車上での寒さは厳しく、外景を眺める気にもなれない。一日がかりで撻県、蘭陵鎮、下庄、博家荘を通過して第二百十連隊本部のある沂州である。早速、連隊長小池大佐の訓示を受け各々の中隊に分かれ、自分の中隊へ行く。歩兵砲中隊の渡辺隊は歩いて十分ぐらいの所にある。渡辺隊長はどこかへ出張とかで、隊長